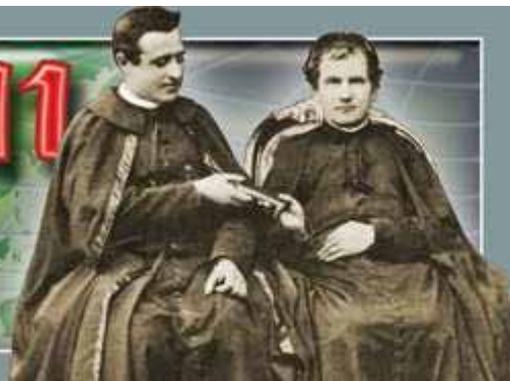


CAGLIERO¹¹

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.31 - 2011年7月



ドン李テソクの生涯と霊性

トンジのドン・ボスコ

親愛なるサレジオの宣教師、 サレジオ・ミッションの友人の皆さん！

2011年6月24日、「トンジのドン・ボスコ・ドン李テソクの生涯と霊性」と題された講演会が韓国、ソウルの管区長館で開催されました。この愛すべき宣教師の死から1年半が過ぎました。ヨハネ李は司祭に叙階されてまもなく、2001年の6月24日にスーダンのトンジ共同体に派遣されました。彼は医師、音楽家、教師、サレジオ会員でした。ドン・ボスコの息子として、献身的な質素な生活を送りました。癌のため13ヶ月の闘病生活の後、2010年1月14日に47歳でこの世を去りました。

ヨハネは才能に恵まれた若いサレジオ会員でした。デリムドンの共同体で実地課程をしたときは、危険にさらされた少年たち80人のアシスタントでした。運動場でも教室でも、音楽の才能を創造力豊かに活かしました。18歳で初めてハングル文字の読み書きを学ぶ80人の扱いの難しい少年たちを想像してみてください。それでも、毎週日曜日の夜になると、少年たちはヨハネの作曲したポップ調のタンテウム・エルゴをラテン語で歌うのでした！ 実地課程の後、ヨハネは1997年に神学の勉強のためUPSに送られました。助祭となったヨハネは、夏休みにアフリカへ行くことを希望しました。自分の場がそこにあるかどうか、知りたかったからです。み摂理とジェームズ・プリカル神父のおかげで、そのひと月のあいだに、当時内戦状態であった南スーダンまで行くことができました。トンジの共同体で過ごした数日間と、近くに住むハンセン氏病の人々との出会いは、彼の心を捕らえるに十分でした。ヨハネは司祭に叙階された後、「イエスに仕えるようにハンセン氏病の人々に仕えるため」、医師、サレジオ会員、司祭として豊かな人生を送るため、トンジに戻りました。

ヨハネは、さまざまな国籍の会員から成るトンジ共同体の一員になりました。トンジ共同体は、内戦の後、キリスト者共同体、オラトリオ、学校、多くの村の宣教拠点を再建する使命がありました。皆が彼をFather Jolly=楽しい神父と呼んでいました。快活で、若者たちとの友情にあふれていたからです。彼は心のすべてを若者たちと分かち合いました。

多くの人の助けによって、ヨハネは小さな診療所とプラス・バンドを創設しました。彼の死後、ドン・ボスコ・ラジオ91 FMが開設され、現在、中等学校の建設が進んでいます。

トンジで働いた8年の間に、トンジでの体験について二つの本（「アフリカの太陽の光はまだ悲しみの色」と「友だちになってくれる？」）を書いたほか、韓国のテレビ局KBSもドキュメンタリーを制作するために現地を訪れました。



韓国スウォン教区のパウロ・チョイ司教も、トンジとヨハネの医療ミッションを直接見るために訪れました。ここ12ヶ月の間に、何千人もの人々が韓国テレビのドキュメンタリーに基づいて作られた映像作品「スーダン、私のために泣かないで」を見ました。現在、作品は数ヶ国語に訳され、世界各地に広まっています。ヨハネ神父の姿は多くの人を引きつけ、スーダンのサレジオ会事業を助ける「ヨハネ李基金」に3万人近い人々が関わっています。韓国にいたとき、私はヨハネの院長、後に管区長を務めました。私が訪れた最初のアフリカの国はまさにスーダンでした。私が最後にヨハネ神父に会ったのは、その死の一週間前、2010年の冬、ソウルで彼が病者の塗油を受けたときでした。

ヨハネ神父は、喜び、楽観的態度、一貫性、情熱、深い家庭的精神のうちに自分の召命を生きました。

私たちは、宣教召命の物語を語らねばなりません。宣教師たちの模範は魅力的で、南スーダンのトンジのような前線の状況にある多くの共同体で、今日もドン・ボスコが生きているということを見るように呼びかけるものです。このようにして、宣教召命がどのように生まれるのか、多くの若者が理解できるようになるでしょう！今年、宣教召命を頂いたすべてのサレジオ会員が、再び、少なくとも一度、福音的生活の道を導いてくださった主の呼びかけについて、語る機会があることを私は願っています。観想生活の宣教の側面を促進すること。宣教の促進、養成、組織化をさらに力づけることです。

Václav Clement

宣教師顧問
ヴァツラフ・クレメンテ神父

宣教師になりたかった、でもその前に 恐れと不安を克服しなければならなかった

私

はサレジオ会員たちのもとで成長しました。幼いころから、ナイジェリアにやって来る宣教師たちの生き方や人々を信仰の道へ導く姿に心を奪われました。ガーナで修練期を過ごしていたとき、私たちはミサのために周辺の村へ出かけていました。私が宣教師になるように呼ばれていると最初にしたのはそのような体験をしているときでした。そしてやはり同じ修練期のときでした。サレジオ会の聖人たちについて学んでいたとき、私は福者ルイジ・ヴァリアラの生涯に深く感動し、自分の模範として彼を選びました。しばらくの黙想と祈りの時を経て、私は修練長に宣教師になりたいという望みを打ち明けました。

ナイジェリアは確かに、今も多くの宣教師を必要としています。しかし私は、自分自身、宣教師になろうと決めました。受けた信仰を、キリストをまだ知らない人々と分かち合いたかったからです。またそれが、私たちの管区に頂いた数えきれないほどの祝福と召命への感謝のしるしになると感じました。しかし、スーダンに派遣されると伝えられてから、眠れない夜を何日も過ごしました。

いろいろな話を耳にし、なぜスーダンなのか、と自問しつづけました。幾度か真夜中に目を覚まし、泣きました。心に感じるあこがれに応えたいと願っていましたが、同時に恐れや不安を捨て大胆に希望するため、自分と闘わねばなりませんでした。

ローマの新宣教師オリエンテーション・コースに参加できたことを感謝しています。ほかの宣教師たちの夢や思いに耳を傾け交流できたことで、とても気持ちが楽になりました。自分ひとりが恐れや不安を抱えているわけではないとわかったからです。またコースを通して、それまで思ってもみなかったような宣教師生活の領域に目を開かされました。

スーダンでの最初の数ヶ月は、浮き沈みの連続でした。気候はひどく暑く、乾燥していました。アラビア語は一言もわかりませんでした。学校でもオラトリオでも少年たちと会話できないので、ひどく無力さを感じました。何で自分はスーダンにいるんだろう、とさえ思いました。修道生活はイスラムにない概念なので、ムスリムの少年たちは何度も私に子どものことを聞いてきたり、妻たちはどこにいるのかと聞いてきたりしました。人々のためにやるべきことも多く、置かれた状況に圧倒される思いでした。しかし、人々の生き方やその言葉を学びはじめたとき、そして兄、友だちとして少年たちと共にいるようにしはじめたとき、すべてが変わりました。まもなく、彼らをもっと理解しはじめていく自分に気づきました。

今、メッシーナで神学を勉強していますが、これまでの体験をふりかえる時間を持つことができます。私が気づいたのは、たとえ彼らに説明できなくとも、この貧しい少年たちのただ中で、私は自分のサレジオ会召命を、またサレジオ的な教育のスタイルをよりよく理解できるようになったということです。彼らからたくさんを学んだことに、今気づいています。私のサレジオ会修道生活のあかしから、彼らも何かを学んでくればと願っています。宣教師召命という賜物を、そしてこの呼びかけに日々応えるために下さる恵みを、神に感謝します！



ナイジェリア出身、スーダンの宣教師
アキニエミ・マシュー・オルソラ神学生



サレジオ会の宣教の意向

アフリカ・医療奉仕の取り組み

医療の分野で直接働くアフリカのサレジオ家族のすべてのメンバーのために。

アフリカのシノドスは次のように述べています。「エイズはマラリアや結核と共に、アフリカの人口の多くを奪い、経済と社会に深刻な被害をもたらす流行病です。医療・薬の問題、あるいは単なる人間行動の変化の問題、いずれか一方の問題としてとらえるべきではありません。それは真に、総合的發展と正義の問題であり、教会は全体的なアプローチと応答を求められています。」(Propositio 51) 良きサマリア人として知られる福者ルイジ・ヴァリアラとアルテメデ・ザッティが、ドン・ボスコの精神のうちに、サレジオ家族の兄弟姉妹を守り、照らし導いてくれますように。



ご意見をお送りください。 segrgia@donboscojp.org